

全体を俯瞰して進むリーダーシップを



教養があり、しっかりとした人間性



最善の結果を目指し続ける



TSUKU COMM  
SPECIAL TALK

# [鼎談]

## 名選手の資質、名監督の条件

SADAHARU OH

### 王 貞 治

福岡ソフトバンクホークス取締役会長

HUA-WEI LIN

### 林 華 韋

国立台湾体育運動大学校長 / 筑波大学台湾校友会会長

KYOSUKE NAGATA

### 永 田 恭 介

筑波大学学長

スポーツと大学。かけ離れた世界のようにですが、自らの限界に挑戦するプレーヤー、チームの力を引き出す指導者、組織全体を指揮するマネージャー、といった各レベルの役割や組織の構造から捉えると、両者には接点があります。通算本塁打の世界記録を樹立し、日本のプロ野球界を長年にわたって支えてきたレジェンド、王貞治氏、日本の社会人野球で活躍した後、筑波大学で学び、台湾代表チーム監督を経て、現在は教育者として後進の育成に尽力する台湾野球界の第一人者、林華韋氏をお迎えし、人材育成や組織運営の極意について、永田学長とともに熱く語りました。

#### ■ ベストにこだわる

**永田** ● お二人は、WBC (World Baseball Classic) までの対戦など、野球を通して交流が続けられてきました。台湾でも日本でも、野球はとても大切なスポーツのひとつですから、そういう長い付き合いというのは両国にとっても意義のあることだと思います。

さて、王さんと言えば、なんといっても一本足打法です。そこで最初に伺います。あの打法は、肉体的にもかなりきついと思うのですが、引退されるまでずっと続けられました。その秘訣をどうしてもお聞きしたいのですが。

**王** ● まず、一本足打法をなぜやったかという、バッティングで一番大事なのはタイミング、ボールとの距離感です。バットにボールが当たった時



に、ボールにいちばん力が伝わる位置があるのですが、これには手の長さ、バットの長さなどによって個人差があります。私の場合は、ボールが中に入りすぎて窮屈な打ち方になっていたので、もう少し前で当てようと、いろんなことをやってみました。すると、打つ体勢を作るのに、少し早めに動くの良い感覚がつかめたんです。ただ、それには片足を上げますからバランスが悪くて、なかなかベストの位置になりません。でも、いい位置で打った時は、ものすごく飛ぶものですから、なんとかこれで確率を上げていくしかないと思って、ひたすら練習しました。片足で何分も立ったり、頭がずれないようにしたり、細かいことなんですけど、体得するのはきつかったです。それでも、うまくいった時の結果が最高に素晴らしいので、それをずっと追いかけてきました。

**永田** ● 選手としてベストにこだわる気持ちをお聞きして、ワクワクしました。私にとっては、永遠に「王選手」ですから。チームにおける選手というのは、大学でいうと研究者にあたると思

いますが、研究者が持つべき姿勢は、今おっしゃったことに近い、つまり最善の結果を目指し続けることです。共通の考え方が当てはまりますね。

#### ■ 名選手は名監督になれるか

**永田** ● 教育者（指導者）あるいは監督は、個々の学生や選手の能力を引き出していくことが、さらに学長や会長のような運営責任者になると、組織全体をうまく統括することが求められます。選手（学生、研究者）、監督（指導者）、運営責任者が、それぞれ力を発揮して世界と戦いながら、良い結果を出さなくてはならないのは、大学も野球も同じです。お二人は、ともに、監督としても輝かしい業績を挙げておられます。指導者の立場になって、一番気を付けられたことは何でしょうか。

**王** ● 選手たちの相手に対して向かっていく気持ち、勝利に対する執念を高めさせてグラウンドに送り出すのが、監督の仕事だと思っています

す。選手生活の中で、ほとんどの時間は技術を磨くために費やされます。だけど、表に出るのは戦う場面です。この時に、今まで積み重ねてきたものを、存分に発揮するには、闘争心や集中力、体調などいろいろなことが影響します。それらを選手にとって最適な状態に整えるんです。今は、ピッチングやバッティングなど、個々の技術コーチがいます。監督の仕事は、それらを一つに結集させ、勝ちに結び付けることです。また、監督のそういう思いを選手に気付かせる、この監督についていけば大丈夫だと思わせることも大事です。

**林** ● どんな選手でも必ず好不調の波がありますし、勝ち続けていると油断も出てきます。野球は団体で長いシーズンを戦いますから、メンタルやスタミナなども含めて、個々の選手のコンディションをよく見ながら、チーム全体としていつも勝てるように調整しなくてはなりません。日々の練習でも、コーチとも相談しながら、選手ごとに丁寧に説明や振り返りを行うようになっています。厳しいことを言うときもありますが、それ



TSUKU COMM  
SPECIAL TALK

## [鼎談]

SADAHARU OH  
王 貞治

HUA-WEI LIN  
林 華章

KYOSUKE NAGATA  
永田 恭介

はむしろコーチに対してです。監督は、特に試合中は、できるだけポジティブな盛り上げ役になる方が良いですね。

**王** ● 戦う意義というのもみんな受け止め方が違いますからね。技術的なレベル、集中の度合いもいろいろです。なぜ一生懸命やらなくてはならないのか、目的意識をしっかり持たせるようにしています。もちろん、自分のためであるのが一番ですけど、そういうことって当たり前のようできて意外とわかっていないんです。

**林** ● 私は20代後半で選手を引退して、筑波大学でトレーニング学を学びました。当時はまだまだあまり知られていない学問でしたが、台湾に帰ってコーチになった時にはすごく役立ちました。30年も前に私が書いたトレーニング計画が今でも使われています。心理学的な方法も確立されてきて、モチベーションを上げるにも、一人一人の個性に合わせた対応が必要です。叱ることで伸びる選手もいれば、叱ると逆効果になってしまう選手もいます。ですから、野球以外の時間でも選手に関心を持たなくては

なりません。

**永田** ● 「名選手、名監督ならず」とも言われますが、優れた選手は、指導者になった時に、知っていて当然だろうとか、自分と同じようにできるはずだ、という態度が出過ぎてしまうのかもしれないですね。

**王** ● あるレベルまで到達した人は、選手が苦痛になるほどの求め方をしてしまいがちです。私もその反省はあります。ただ私は一本足という特殊な打ち方で、練習も独特だったものですから、自分のようにできるという考えで選手にあたったことは一度もないですね。むしろ、私から見ると君の能力としてはこれだけのことはできるはずだ、だから、もう少しチャレンジしてもいいんじゃないか、とそういう話をしました。

**林** ● スポーツには国民性や文化的な特徴も出ます。例えば、短距離ダッシュをすると、日本人は全力でゴールまで走りますが、台湾人はゴール前で力を緩めてしまいます。台湾野球について言えば、そういう意識改革の教育も必要だと思います。

**王** ● 野球では、走り切れればセーフ、そうでなければアウト、というのがはっきりしていますから、言いやすいかもしれませんね。瞬間の力の出し具合で、アウトとセーフは紙一重です。極端に言うと、力を抜いてくるか、一生懸命走ってくるかで、審判のジャッジにも関わるんです。全力を出している姿を見せないと、いい結果には結びつかないんだということがわかれば、変わるんじゃないでしょうか。

**永田** ● 本人が気づくように導くことが大事ですね。

### ■ 組織のトップとしての心構え

**永田** ● さて、球団や大学のトップとなると、個々の人員というよりは、チームやそれを支える人たちのことを考えなくてはなりませんし、社会に対していろいろな発信をする役割も担うことになります。この点で一番重要なことは何でしょうか。

**王** ● ファンの反応はストレートです。ファンが

望んでいるのは、まず勝つこと。勝てばどんな勝ち方でも文句はない。負ければ、どんなに惜しい負け方でもダメです。それを選手たちに理解させます。試合が終わって、ファンに喜んで帰ってもらえたか、今日は納得していないのかな、そういうことは選手も実際に感じますから、それは伝えやすいということはありません。

**永田** ● 球団には選手以外の職員やスタッフもいるわけですが、そういう人たちのモチベーションも上げなければなりません。

**王** ● 我々はもはや勝ち負けだけではお客さんと呼べるとは思っていません。年間に140以上も試合をしますし、テレビ放送もあります。営業の人たちが企業などに売り込みに行ったり、何とかしてチケットを買ってもらう、そういう地道な活動のおかげで球場にお客さんがたくさん来てくれる。ユニフォームを着ている者は、そのことを理解しなくてははいけません。我々が気分よく野球ができるのは、営業や他の人たちの日頃の苦勞があってこそだとわかった上で、試合に臨ませるように心がけています。

**林** ● 選手としては、球場で良いパフォーマンスをすることが第一ですが、どんなに野球がうまくても、他のことは何も知らないのでは、ファンや地域との交流はできません。教養があり人間性がしっかりしていること、つまり人としての模範になることが、一番のサービスだと思います。選手は将来、指導者になったり、野球とは違う道に進むこともありますから、そういう意味でも人間性は大事です。そのことを踏まえて選手と接しています。

大学のトップというのは、野球の監督と似たところもありますが、やるべきことの範囲はずっと広がります。私の大学の最大のミッションは選手の養成ですが、学生生活、研究、安全、地域交流、国際化など、いろいろなことを考えます。幸い、学生や教職員もよくついてきてくれています。野球をずっとやってきて、海外での経験もたくさんあることが、学内外で良い人間関係をつくるスキルに結び付いているのかも知れませんね。

#### ■ 変化を拒まない姿勢

**永田** ● ところで、野球が人気スポーツであることは変わらないと思いますが、日本や台湾、そして世界の野球界が、これからさらにどういう方向に発展していくのが望ましいとお考えですか。

**王** ● やはり見る側が求めるのは、例えば大谷翔平選手のような、スーパーな選手です。ずば抜けた人が現れると全体が盛り上がるんですよ。ですから、そういう選手を生む土壌をつくっていきたくと考えています。それには、プロに限らず野球全体として、選手も指導者も、もっと高度で科学的な練習方法を導入することだと思います。野球というのはおかしなもので、ピッチャーからバッターまでの距離、ホームから1塁までの距離、これはもう100年ぐらい変わっていませんが、その中の人間同士の戦い方は、我々の時代よりもずっと複雑になっています。ピッチャーの球種が増えて、バッターも

それに対応する。ルールは変わらなくても、方法論や技術は劇的に変化をしていますし、これらもそれは続くと思います。

**永田** ● よく理解できます。大学をとりまく環境もダイナミックに変化していますが、要は良い研究をすること、新しいものを生み出すこと。それなしに、どんなに教育を謳おうが、全く意味がありません。環境や手法は変わってもルールは同じです。スポーツと違って、我々には明白な勝敗はありませんが、結果がすべてという意味では似ています。何日も寝ずに研究しても、別の人が先に成果を出してしまったら、その努力はノーカウントなんです。

**林** ● 台湾野球界の最大の問題は、アマチュアとプロの仲が良くないことです。日本も以前は同じでしたが、今はうまくいっています。それは、プロ野球側が、アマチュア野球や学生野球が人材育成の基本だということに気付いたからだと思います。台湾の野球はまだそこまで理解していないと思います。

**王** ● お互いに情報を交換して、育成も力を合わせてやっていくのが良いですね。特に台湾の場合は、日本に比べれば野球人口が少ないですから。でも台湾には運動能力の優れた人が多い。そういう人々を選抜して集中的に鍛えれば、かなりのレベルまで上げられると思います。日本との国際交流試合も刺激になると思いますが、まず国内で、こんなチーム、選手を育てようという共通の目標を持つことが重要ですね。それにはやはり、社会全体で育てることが重要です。選手たちに意欲があっても、社会がそれを



受け入れる体制をつくって支援しなければ伸びないと思います。プロとアマ、教育政策や若者の育成なども含めて、一つの方針に向かって、みんなでスクラムを組んでいくということが一番大事だと思います。

**永田** ● 多くの台湾出身選手が日本で活躍し、日本の選手もメジャーリーグでプレーしています。メジャーには、いろいろな国から選手が来ています。世界的に、国境にとらわれず、レベルの高い野球を目指すようになってきたと思います。国際的な開かれ方という点で、日本や台湾の野球界はどのような状況なのでしょう。

**王** ● 日本のプロ野球界もかつては、選手をアメリカに行かせませんでした。いい選手が流出してしまうことを恐れたんです。でも、野茂(英雄)という投手が見事に道を切り拓いてくれました。当時は国賊扱いされましたが、彼のおかげで、いまや、松井(秀喜)やイチローや黒田(博樹)など、数は少ないが堂々とメジャーで活躍しています。こういうふうには、いったん壁が崩れた後は、日本の野球も格段にレベルが上がりました。不可能に見えることでも、それを突破するための努力をする人たちがいるべきだと思います。

**林** ● 台湾では野球産業のスケールが小さいのですが、日本はもちろん、アメリカへ渡る選手も増えています。また、郭泰源や郭源治など、日本で活躍した選手たちが、台湾に帰ってきて、台湾野球の国際化や技術のレベルアップに貢献してくれています。彼らの野球に対する考え方も、とても役に立っています。

### ■道を切り拓く人を育てる

**永田** ● 日本では2020年にオリンピック・パラリンピックが開かれます。野球に限らず、スポーツが日本の社会に変化をもたらすこともあると思います。その意味で、これからどのような人材が必要だと思いますか。

**林** ● 大学での人材育成は、社会の変化に対応しなくてはなりません。スポーツは言葉を越えます。同じルールの下で言葉が通じなくても競技はできます。若い選手には、試合を通じて世界と交流し、ひいては健康や平和を実現する、そういう社会的な役割も期待されます。そのために、カリキュラムも含めた改革が必要だと思っています。

**王** ● スポーツでは、選手の育成や各競技の発展に目が行きがちですが、同時に、全体を俯瞰して進むべき方向を示し、みんなを動かすような、強いリーダーシップを発揮する人が必要です。ですから、各部門のトップの人にはもっと頑張ってもらいたいですね。どんな分野でも、然るべき人が本気になれば、みんなついて行くんです。そういう、自ら道を拓き、社会をけん引する人材が、これからいろいろな場面で求められていくと思います。

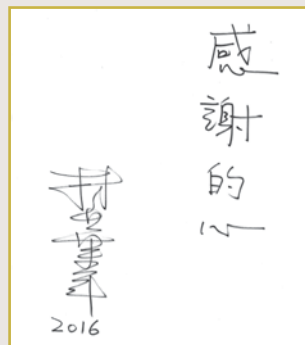
**永田** ● 人材育成の面では、大学とスポーツ界とで、一緒にやっていたいけることもありそうです。お二人のお話を伺って、私も元気づけられました。これからますますのご活躍に期待しています。短い時間でしたが、ありがとうございました。

## TSUKU COMM [鼎談] SPECIAL TALK

王 貞 治 | 林 華 章 | 永 田 恭 介



王貞治氏より



林華章氏より

